

富士通「らくらくスマートフォン 2/プレミアム」

メニューは押し込んで決定
シニア層にやさしい画面デザインも魅力

スマートフォン普及に伴い、それ以前の携帯電話端末（いわゆる「ガラケー」）が旧世代の遺物のごとき扱いを受けるようになって久しい。が、ことUIに関して言えば、果たしてガラケーのそれをスマホが凌駕しているとは到底思えず、高齢者などへのスマホ普及に待ったをかけている印象も否めない。そんな状況に変化をもたらしてくれそうなのが、富士通製の「らくらくスマートフォン」シリーズだ。

今回紹介するのは、8月に発売された「らくらくスマートフォン2」(F-08E) および10月発売「らくらくスマートフォン プレミアム」(F-09E)。後者は「らくらく」シリーズ初のGoogle Play対応となる上位機種だ。

UI特性において最大のポイントは、各メニューアイコンの選択→決定のタッチ操作において「押し込み」が求められることだろう。

通常、タッチ操作はその名の通りアイコンへのタッチによって操作が完結するため、スクロールの際に不用意に何らかのアイコンに触れてしまえば、意図しないアプリが立ち上がってしまうことがある。スマホ操作で起こりがちな場面のひとつだ。

「らくらくスマートフォン」の場合、メニューアイコンを押し込まなければ「決定」判定は下されない。つまり、前述した誤操作の場面はほとんど起こり得ない。「触れただけでは反応しない、ということによって一定の安心感を持っていただけるようです」（富士通担当者）。

ちなみに初代「らくらくスマートフォン」ではしっかりとした押し込みが求められていたが、新規発売された2機種については微調整がなされ、押し込み感が軽くなったそうだ。といっても、実際に利用してみるとやはり「押し込む」という明確な意思がなければ反応しない。

使いやすい画面デザイン

スクロール方向が縦方向のみ、というのも大きな特長だ。スマホの画面スクロールは左右方向への切り替えが一般的だが、「らくらくスマートフォン」では縦方向にメニューアイコンを配置しており、画面そのものを切り替えるというより上下のスクロールによって表示位置を変える、というデザ

イン。これにより、目指すアイコンの位置を把握しやすく、また現在位置を見失いにくい。

「らくらくホン」時代から好評だったワンタッチダイヤルの存在も見逃せない。頻出電話番号の呼び出しに用いられる機能で、スマホでも同様に踏襲されている。ついでに「よく使うアプリ」でも呼び出せれば面白そうだが、使い手を余計に混乱させそうなのでなくて正解だろう。

筐体ディスプレイ面にある物理的なボタンは「ホーム」のみ。開いている画面で迷子になったら、このボタンを押してホーム画面に戻ればいい。ちなみに電源ON/OFFやカメラのシャッターは側面部に配置されている。

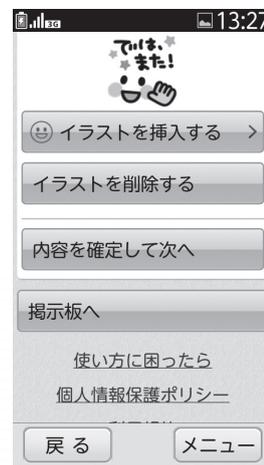
実際に高齢者に利用させてみると……

さて、シニア向け端末ということで当方では評価に限界があると考え、富士通より貸出機を得て身近な高齢者に体験してもらうことにした。サンプル対象は、多少デジタル機器へのリテラシーがある64歳女性（パート）。

まず良かった点として挙げたのが「画面デザイン」。アイコン配置がわかりやすく、選びたいメニューを探すのに苦労しなかった、とのこと。ひとつひとつのメニューアイコンも大きくてわかりやすく、アイコンから中身が一目瞭然であることも高評価だった。



トップ画面。「らくらくコミュニティ」参加時、投稿への反応があればトップ画面にも通知がくる



メニューアイコンはひとつひとつのサイズが大きく、中身も一目で把握しやすい

次に文字入力。例えば「う」の文字を表示するためには「あ」キーを3度叩く必要があるが、入力間隔が空いてしまうと「いあ」などと表示されてしまうのはよくあるケース。「らくらく」では、矢印キーでカーソル移動しない限り入力位置がかわらないため、慌てることなく文字入力が可能だったそうだ。

こうした使い勝手の良さから、シニア層を対象に富士通が用意したSNSプラットフォーム「らくらくコミュニティ」を熱心に利用するようになったことは驚きだった。自身の投稿に対して何らかの反応があった場合、端末筐体のランプでいつでも知らせてくれる点も「参加のよろこび」を刺激したようだ。

「使いやすさ」というアプローチでSNS経験ゼロの高齢者をその道に引き込んだ「らくらくスマートフォン」の威力を実際に見て、あらためて高齢化社会におけるUIの重要性を学ばせていただいた。